国内研修成果報告書

テーマ：「嬉野温泉のティーツーリズムと暮らし観光から考える風土に合った観光の持続性について」

研修概要

- 研修場所： 佐賀県嬉野市嬉野町 旅館 大村屋
- 研修期間： 2024 年 2 月 7 日～2 月 9 日
- 研修参加人数： 1 名

1. 研修動機

私が今回の研修地に嬉野市を選んだ理由は、ローカルイノベーション論の講義で紹介された「暮らし観光」や「ティーツーリズム」に強く関心を持ち、実際に体験したいと考えたからだ。特に、旅館大村屋の北川さんによる講義は、観光の方法について深く考えるきっかけとなった。嬉野温泉では、従来の観光とは異なり、まち歩きなどを通じた「暮らし観光」や、お茶農家が生産者とサービス業を兼業することで収益を向上させる「ティーツーリズム」など、地域資源を活かした持続可能な観光に取り組んでいる。この取り組みにより、移住者の方が新しくお店を営み、お茶農家の担い手確保や収入の増加といった好循環が生まれている。私は、この「暮らし観光」を実際に体験し、第一次産業の担い手確保や地域の新たな価値創造を通じた観光の持続性について学びたいと考えた。

2. 嬉野温泉と嬉野茶の現状

＜嬉野温泉について＞

嬉野温泉は、かつて団体旅行によるマスツーリズムの地として栄え、1960 年代から 20 年間で宿泊客数が倍増した。しかし、バブル崩壊後の 20 年間で観光客数が半減し、経営困難に陥る旅館や商店が相次いだ。現在ではピーク時の約 6 割程度の観光客数で推移している。

＜嬉野茶について＞

嬉野茶の生産量は全国の茶生産量の 1%に満たない。製法の特徴として、一般的な茶葉よりも使用している部分が少なく、収穫量が一般的な茶葉の半分程度にとどまる。また、嬉野茶は山の斜面で生育させており、大量生産ができない。そのため市場価格は一般的なお茶と同程度で取引されているが、ティーツーリズムで付加価値をつけることで持続可能な経営が進んでいる。

3. 研修の流れ

2 月 7 日

- 午前：移動
- 午後：
    - 北川健太さん（旅館大村屋）へのインタビュー
    - まち歩き（嬉野町）

○　松田二郎さん（茶屋二郎）へインタビュー

2 月 8 日

- 午前：まち歩き（塩田町）→積雪のため中止、まち歩き再訪（嬉野町）
- 午後：久野裕子さん（おさんぽ工房）へインタビュー

2 月 9 日

- 終日：移動

4. 研修内容

（1）北川健太さんへのインタビュー

嬉野温泉駅に到着後、旅館大村屋へ向かった。雪の影響で到着が遅れたにもかかわらず、代表取締役の北川健太さんは快く迎えてくださり、インタビューの時間をいただいた。北川さんは、嬉野温泉における「暮らし観光」を主導し、「ティーツーリズム」にもお茶農家と連携しながら積極的に取り組んでいる。インタビューを通じて、地方の人口減少が進む中での観光のあり方について、多くの示唆を得ることができた。特に印象的だったのは、地域経済の循環の重要性についての考えだった。人口減少が進むと、大手チェーン店は採算が合わず撤退してしまう。その結果、地域の個人商店が経済を支えることになり、観光と地域経済の結びつきがさらに重要になる。嬉野では、八百屋や魚屋の売上の約半分が旅館への卸売で成り立っており、旅館と商店は密接な関係にある。つまり、観光業の活性化は地域経済全体の活性化につながるということだ。また、北川さんは「まち歩きを通じて地域の商店の魅力を知ってもらい、地域のファンを増やすことが、持続可能な観光の鍵になる」と話していた。この考えのもと、コロナ禍以降、「まち歩き」の取り組みを開始したが、地域からの反発は一切なかったという。それどころか、北川さんがリーマンショック時に嬉野へ戻り、地域に根ざした活動をすることへ協力的な姿勢が生まれていたそう。北川さんが考える「持続可能な観光」とは、単に観光客を増やすことではなく、「人が住み続けられるまちづくり」である。そのためには、地域経済の循環を意識し、観光を地域全体の発展につなげていくことが不可欠であると改めて感じた。

（2）まち歩き（嬉野町）

インタビュー後、北川さんの案内のもと、個人商店を巡る「まち歩き」を体験した。北川さんが実践する「まち歩き」は、事前にアポイントを取らずに訪問することを大切にしている。これは、地域のそのまま感じてもらうためだという。地元の温泉、駄菓子屋、八百屋、サイクリング屋、洋服屋、洋菓子店など、さまざまな商店を訪れたが、どこでも温かく迎え入れてくださった。お店の皆さんは気さくで、地元に根付いた暮らしの中に観光が溶け込んでいることを実感した。さらに、「法政大学の研修で来ました」と伝えると、「毎年来ているね」と、すぐに受け入れてくださったことが印象的だった。雪が降るなかでも、すれ違う人々がまるで旧知の仲のように挨拶を交わしていた。その光景から、嬉野というまちは、観光地でありながらも、地域の絆がしっかりと息づいていることを改めて感じた。

（3）松田二郎さんからのヒアリング

松田二郎さんは、移住者として「茶屋二郎」というお茶農園を営むと同時に、「茶屋BAR」を経営している。また、ティーツーリズムにも参加している。現在、嬉野のティーツーリズムは全国的に注目を集めており、静岡県や鹿児島県といった他の茶の産地からも視察が訪れるほどだ。嬉野茶の特徴のひとつは、山の斜面に茶畑が広がっていることだ。そのため、茶畑の中に茶室を設け、そこで農家自身が淹れたお茶を味わうことができる。お茶を最も美味しく淹れられるのは、生産者である農家自身。彼らが淹れるお茶を飲みながら、茶畑の絶景を楽しむ体験は、ティーツーリズムの醍醐味である。また、嬉野の茶農家は比較的規模が小さいため、ティーツーリズム向けの特別なお茶を生産することが可能

だという。大規模な茶農家では、一部の人が新しい取り組みに賛成しても、全員が賛成とは限らない。しかし、小規模農家であれば、柔軟な発想で新たなチャレンジができる。二郎さんは、「お茶を自分で作り、直接販売できることはありがたい」と話していた。そうることで、市場に卸すよりも適正価格で売ることができ、しかし、お茶農家は参入障壁が高く、通常は設備投資に約 1 億 5 千万円もの費用がかかるという。彼は、地元の茶農家を手伝うことで焙煎所や機械を借り、初期費用を抑える工夫をしている。また、彼自身が一次産業に新しく参入するモデルケースとなることで、今後、より多くの人が茶農業に携われる環境を作ることを目指している。さらに、二郎さんが大切にしているのは、「自分が立っているこの場所がなぜ残っているのかを考えること」だという。「自分の育てたものが本来の価値で取引されているか？ 先祖が満足するような仕事ができているか？」そうした問いを持ち続けることが、事業の持続につながると語っていた。お茶の場合は、適正価格で販売できれば、収益をより良い肥料の購入に充てることができ、結果として品質の向上につながる。良い肥料を使えば、作物は丈夫に育ち、農薬の使用を抑えることも可能になり、好循環が生まれるのだ。また、彼が経営する「茶屋 BAR」は、お茶を売るだけでなく、お客様の反応を直接見ることができる貴重な場でもある。お客様と対話をしながら、自分のお茶の価値を再確認し、次の改良や挑戦につなげていく。ティーツーリズムや茶屋 BAR は、単なる販売の場ではなく、農家と消費者をつなぐ大切な架け橋となっていると感じた。

（4）まち歩き再訪（嬉野町）

二日目の午前に予定されていたまち歩きが中止となったため、前日に訪れた嬉野の商店を再び訪れることにした。その中で特に印象に残ったのは、「人が好きだから、まち歩きで人と話すのは仕事の一部」という言葉だ。この言葉から、商売が単なる生業ではなく、人とのつながりを大切にする姿勢が強く感じられた。地域の人々との温かい交流が、日々の仕事に喜びをもたらし、それが地域全体の活気につながっているのだろう。また、一日目には訪れなかった商店にも足を運んだが、どの店でも温かく迎えてくださった。その姿勢から、嬉野の町に根付いた「受け入れる文化」を強く感じた。ある店員は「地域を愛することが一番大切」と語っていた。その言葉の通り、地域への深い愛情がまちを支えているのだと実感した。そして何より、こうした地域の想いが、訪れる人々にも伝わり、自然と自分自身のこととして考えるようになっていくのを感じた。地域の課題や魅力が、どこか遠い話ではなく、自分の暮らしや未来とつながっていると感じた。

（5）久野裕子さんからのヒアリング

14 時ごろ、地域おこし協力隊として嬉野に移住し、現在は移住支援に携わる久野裕子さんにお話を伺った。久野さんは、北川さんの活動を参考にしながら独自のまち歩きを実施していた。そこから、市のシビックプライドを目的としたイベントにも関わるようになったそう。嬉野市は移住促進のための助成金制度が充実しており、多様な支援策が整っていることが分かった。しかし、支援があるだけでは移住が成功するわけではない。久野さんは、「持続的な観光と地域づくりには、地域を良くしたいという思いを行動に移すことが不可欠」と語る。たとえ小さな取り組みでも、それが積み重なっていくことで大きな変化につながるのだ。また、久野さんは「新しいことをやらなければ生き残れない」と強調し、移住者を受け入れ支える地域の存在の重要性についても触れた。地域の人々の協力や理解がなければ、移住者が根付くことは難しい。さらに、まち歩きはその地域ならではの特色を引き出せる活動であり、工夫次第でどんな地域でも実施できることを改めて実感した。久野さんの言葉から、「まちのために何かしたい」という気持ちの大切さと、その想いが地域の未来を形作っていく力になることを深く感じた。

5. まとめ

従来の観光は、日常から離れた癒しや娯楽を求めるものであった。しかし、「暮らし観光」は、地域の風土や日常の営みに触れることで、これまでとは異なる非日常を提供する。観光客が地域の人々と交流し、その土地の暮らしを体験することで、深いつながりが生まれ、リピーターや地域のファンが増えていく。また、嬉野温泉では「ティーツーリズ

ム」という新たな観光のスタイルが注目を集めている。この取り組みは、地域資源であるお茶を活かしながら、訪れる人々に特別な体験を提供するものだ。さらに、「暮らし観光」とティーツーリズムを組み合わせることで、観光客の多様なニーズに応えるだけでなく、地域経済の活性化や持続可能なまちづくりにも貢献している。今回の研修を通じて、観光と地域の関係は単なる「訪れる・もてなす」という一方的なものではなく、相互に影響し合いながら発展していくものであることを学んだ。嬉野温泉の事例は、地域の魅力を引き出しながら持続可能な観光を実現するための一つのモデルと言える。この学びを活かし、今後も地域の在り方や観光の可能性について考えを深めていきたい。

参考文献

野田岳人,2024,「地域ツーリズムにおけるローカルイノベーション」,ローカルイノベーション論,法政大学.

嬉野暮らし観光まちあるき実行委員会,2024,『まち歩きを通じた地域価値の再構築』.